

IV. 総括と今後の課題

水環境は土地利用形態の変化に伴って変化する。水環境の変化は生態系にも当然影響を与える。水質の富栄養化は水生生物に影響を及ぼし、湧水量の減少に伴う地下水位の低下や土壌水分の減少は湿原を湿原でなくする。これらの水環境変化については今後の農業・農村環境整備の計画において、先ず第一に過去の実態を十分認識しておく必要がある。それはあちこちの自治体において、ホトやマガカヲを環境の中に再生・復活させて農村活性化に結びつけようとする計画が見られるが、そのような計画の実施のために何が条件として不可欠であるかの検討が必要であるからである。水環境の改善や保全是短時間で実施できるものでもなく、また環境悪化が必ずしも目に見えて進行するものでもない。環境変化とは一般には「気がついてみたら大変なことになっていた。」というものである。

水環境問題の河川水質に関するものについては、まず汚染源となるものをなくす、もしくは汚染源の河川への流入を防止することしかない。農業・農村地帯における悪臭・異臭の問題もその本質は河川水質の問題と同様であると考ええる。

その他の水環境の一つの問題は、河川の流出率を小さくし、如何にして降水の有効化を図るにかかっていると考える。乾燥地・半乾燥地での灌漑水源を地下水に依存している地域は時間の問題であって地下水の枯渇によって農業は営めなくなる。逆に、地表水であっても降雨による補給以上の水利用は時間の問題で地表水の枯渇とともに乾燥地化する。外国におけるいくつかの事例がこれらのことを如実に物語っている。

水資源の観点からも降水が多い湿潤気候であるのにも関わらず、降水を有効に利用できないことは問題である。防災のみに偏りすぎた河川政策であったのではないか。低水流量、平水流量を多めに管理しする必要があるのではないか。その結果、河川の自浄機能も増加し、環境容量も増大する。河川流量データを検討し、河川流況の現状を観察して考える。

本報告の中にも述べた都城盆地のみならず、宮崎県央の農業地帯においても河川水量が数十年以前に比べ非常に少なくなっており、水田に利用していた湧水量が半分減少し湧水利用の稲作では水田面積、収量が半減している地域がある。このような地域の下流域では国指定の湿原の環境変化が問題となっている。

農業・農村の環境問題の解決は、つまるところ環境に影響を及ぼす加害者であり、かつ逆に影響を及ぼされる被害者である地域住民の環境に対する問題意識に帰結すると考える。水環境問題も多かれ少なかれ同じであって、その代表の水質問題もそうであるし、水環境保全是地域住民の努力なくしては不可能である。その意味で、地域住民への水環境の現状の周知徹底と、水環境保全に関する教育・啓蒙が非常に重要であると考ええる。その意味でも水環境保全のためには、水環境の実態調査を継続し経時変化、経年変化を追跡し解析することが必要不可欠である。